

内容の変更として扱われることとなり、カード加盟店申請に要していた手続きを簡素化することができました。要旨集印刷は、PDF 原稿を作成して地元業者に印刷製本のみを依頼することで節約しました。また、長崎大学水産学部との共催にすることで、シンポジウム会場に用いた講義室や会議室等の使用料を無料にすることができました。

長崎国際観光コンベンション協会から補助を受けるために、大会参加者の延べ宿泊日数を把握する必要があり、Web ページに宿泊情報の入力欄を設けるとともに、会場受付でアンケート用紙に記入をお願いしました。大会期間が連休と重なったため、長崎市内の宿泊施設の混雑が予想されたことから、旅行会社にホテル宿泊の斡旋を依頼しました。しかしながら、大会参加者の中には、市外のホテルに宿泊されたり、ホテルを途中移動されたりした方もおられ、ご迷惑をお掛けしましたことをお詫び申し上げます。

大会期間中は、大会運営スタッフ 19 名に加えて、学生アルバイト 36 名を適宜動員し、無事に大会を終了することができました。発表件数は例年と比べて少なかったため、口頭発表は 3 会場とし、ポスター発表を多めに配分しました。発表件数が少なかった一因として他学会(地球化学会等)の開催時期に重なった点が考えられました。発表用の PC としては Windows のみを用意しましたが、Mac の使用希望者も少なくなかったため、地方開催における Mac-PC の確保が今後の課題の一つと思われます。学部学生の参加費を無料とした結果、長崎大学水産学部などから 23 名の参加がありました。今大会では、植松会長から多数の会員が専門分野を越えて一堂に会する機会を設けてほしいとの依頼があり、大会実行委員会による企画として基調講演を見延庄士郎会員(北海道大学)、古谷研会員(東京大学)、磨田徹氏(三菱重工業株式会社)の 3 名にお願いし、研究発表 2 日目の午後(懇親会の前)に実施しました。約 330 名収容の第 1 会場がほぼ埋まるほどの盛況で、大変好評でした。機器展示

をポスター会場と同じ部屋で実施するとともに、部屋の一部に休憩スペースを設けることで、機器展示への訪問者数の増加を図りました。大会初日に 3 件のシンポジウムと教育問題研究会によるサイエンスカフェ(長崎ピースミュージアムにて実施)、最終日に 1 件のシンポジウムが開催され、多くの参加者がありました。大会期間中の育児施設の斡旋と補助金の支給を企画しましたが、残念ながら利用希望者はいませんでした。

懇親会は大会 3 日目夕刻に長崎駅近郊の山の上のホテルで実施し、約 310 名の参加がありました。基調講演終了に合わせて送迎バスを用意した結果、渋滞もなく参加者の移動が予想以上にスムーズに行われ、開宴までホテルのロビーで待機して頂くというハプニングもありましたが、懇親会は大変盛況でした。長崎の名物料理に加えて、美しい夜景や長崎大学龍踊部による伝統の龍踊りを楽しんでいただきました。また、懇親会では学生会員を対象としたベストポスター賞が石山宙夢会員(北海道大学)、山口珠葉会員(東京大学)、野崎龍会員(長崎大学)に授与されました。

今大会には、賛助 10 団体、機器展示 13 団体、広告掲載 16 団体の協力を得ることができ、大会運営の貴重な収入源となりました。大会繰越金は 2014 年度春季大会の後から無くなりましたが、学会から例年の繰越金と同額が大会開催費として支給され、参加費等が入金されるまでの運転資金として活用しました。Web システム業務委託費をはじめ種々の支出を切り詰めた結果、収支決算では、大会開催費を無事に返納するとともに、残額を海洋学会の運営のために寄附することが出来ました。

最後に、大会の円滑な運営にご協力頂いた大会参加者の皆様、大会賛助や広告掲載、機器展示を通じて大会運営を支えて頂いた団体の皆様、会場となりました長崎大学の事務部の方々に厚く御礼申し上げます。

(大会実行委員会事務局長 武田 重信)

アカデミア メランコリア(第 7 回)(若手のコラム)

東京大学大気海洋研究所 林 未知也

私がなぜ海洋学会に入会したかについて、本コラム前回担当者の池上さんにコラム執筆の機会を頂いたので、大気海洋結合系への興味という観点から考えてみた。私は 5 年ほど前から気象学会の会員であり気象学会に毎回参加し、研究発表も何度もしてきた。九州大学の対流圏科学研究室に修士課程を終えるまで 3 年間ほど在籍して、熱帯大気の現象に興味を持って勉強や研究をしてきた。その間、熱源大気応答への惑星温度水平成分の寄与を調べ(Hayashi and Itoh 2012, J. Atmos. Sci.)、続いて Madden-Julian 振動の正体を探った(under review)。そして、博士課程の学生として東京大学の大気海洋研究所気候システム研究系に移ったのがおよそ 2 年前(2013 年 4 月)のことだ。基本的には今でも熱帯における現象を中心に興味を持って研究や勉強を行っている。ただし、この研究所に移ってからは、大気海洋結合系として熱帯を眺めるようになった。

「大気だけじゃない、海洋も同時に眺めなくてはならない」、大気と海洋の結合系としての自然の現象を理解したい。そう思いながら、友人の誘いを受けて「大気海洋相互作用に関する研究集会」に顔を出したことを始めとして、海洋研究者や学生が集まる研究会等に積極的に参加してきた。期待通り、気象学会の大会で研究発表をする時とは参加者からのコメントの視点が異なるから面白い。興味の対象が違うから面白いと感じる「ツボ」が異なると思うし、大学等で初めに学ぶ専門知識が違うから感覚も異なるのだろう。それがきっかけになって意見が食い違うこともある。とにかく、これまで気象学会関係の場のみで活動してきた私は、海洋の研究者にも触れることで視野が広がったし、感覚も豊かになったと感じている。分野間での交流、特に気象学会と海洋学会に所属する者同士の交流は大切だと、身を持って感じ始めている。偶然にも、ちょうど私が海洋の科学にも強く興味を持ち始めた 2013 年に開催された「日本気象学会夏期特別セミナー」(通称、気象 夏の学校)は「海洋若手会 夏の学校」と合同だった。「夏の学校」は学生同士がお互いの研究発表を聞いて議論し、また懇親会を



通じて仲を深める絶好の機会である。これに参加することで海洋学会に所属する多くの学生と知り合うことができた。ひとりの大気海洋結合系の研究をする学生として、海洋の研究者にもっと触れたいと思い、海洋学会へ昨年(2014年)によく入会した。

ちょうどその頃だ。2014年の夏に、振幅の大きなエルニーニョ現象が来るかもしれないと世界中で騒がれた。しかしながら、結局、来なかった。古くに発見されてから多くの理論が提案されてきた大気海洋結合系の現象の動向をつかむことは、現在の気候の予報システムを用いてもまだ困難である。結合系の現象のさらなる理解を目指すためにも、**気象と海洋の学会会員同士が繋がる場所が多く継続的にあることが望まれる**。既存の場は大切にこれからも継続的に利用していきたいし、必要があれば自分で情報の共有や議論を交わすことのできる機会をつくり、これまで以上に互いの繋がりを組織として深めたいと強く感じている。これから10年後に、日本の大気海洋結合系としての組織がより強固なものであることを目指したい。

編集後記



今回の写真はすべてバルーンアートにさせて頂いた。大気海洋研究所が毎年10月に一般公開をしており、卒業生でもある須原さんが、ほぼ実費で、または赤字覚悟で入り口や吹き抜けの部分のデコレーションをしてくださっている。バルーンアートと聞いたときは、風船ひねって蛸やプードルを作るものといったイメージであったが、そんな生易しいものではなかった。ある時はサンゴ礁の美しい生態系が具現化し、ある時は30m以上ある吹き抜けに海の深さを表現する。また、一番重要なのは人を幸せにする力にあふれていることである。アートの源泉が神の世界に近づくことと、人を幸せ

にすることならば、須原さんのアートは純粋に人を幸せに、またハッピーにしてくれるアートである。行ったことはないがディズニーランドが似ているかもしれない。また、バルーンアートは刹那のアートでもある。一般公開終了後、風船はすべて割られ処分される。形あるもののなにも脳裏に焼き付けておかなければ、波打ち際の砂像のように失われてしまう。研究所の一般公開は5000人を超える市民が押し寄せる大イベントとなった。多くは子供づれの家族であり、彼らの笑顔を見ると須原さんの貢献は大きいと思う。いかがですか？

広告募集

ニュースレターは学会員に配布される唯一の紙媒体情報誌です。

海洋学に関連する機器や書籍の広告を募集しています。

お申し込みは日本海洋学会事務局またはニュースレター編集委員長まで。

〒277-8564 千葉県柏市柏の葉5-1-5 / 電話・FAX 04-7136-6172 / メール tsuda@aori.u-tokyo.ac.jp

JOS News Letter

JOSニュースレター
第4巻 第4号 2015年3月1日発行

編集 JOSNL 編集委員会

委員長：津田敦 委員：小守信正、根田昌典、田中祐志

〒277-8564 千葉県柏市柏の葉5-1-5

東京大学大気海洋研究所

電話/FAX 04-7136-6172

メール tsuda@aori.u-tokyo.ac.jp

デザイン・印制 株式会社スマッシュ

〒162-0042 東京都新宿区早稲田町68

西川徹ビル1F

<http://www.smash-web.jp>

発行  **日本海洋学会**
The Oceanographic Society of Japan

日本海洋学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル9F

(株)毎日学術フォーラム内

電話 03-6267-4550 FAX 03-6267-4555

メール jos@mynavi.jp

※今号の表紙および記事には関係のない写真は、東大大気海洋研究所広報室から提供いただきました。